Ensemble Dimanche

アンサンブル ディマンシュ
第91回演奏会

2022年9月24日（土）

府中の森芸術劇場　ウィーンホール

【指揮者プロフィール】

平川　範幸（ひらかわ のりゆき）

福岡県出身。
福岡教育大学卒業。上野学園大学研究生〈指揮専門〉にて下野竜也、大河内雅彦の各氏に師事。桐朋学園大学オープンカレッジにて、黒岩英臣、沼尻竜典の各氏に師事。東京音楽大学特別講座にて、パーヴォ・ヤルヴィの指揮公開マスタークラスを受講する。
これまでに、音楽理論を中原達彦氏に、ピアノを田中美江氏に師事。
新日鉄住金文化財団指揮研究員として、紀尾井シンフォニエッタ東京、東京フィルハーモニー交響楽団のもとで活動する。その後東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団指揮研究員として、宮本文昭、飯守泰次郎、矢崎彦太郎の各氏をはじめとする指揮者のもとで研鑽を積む。
これまでに、東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団、仙台フィルハーモニー管弦楽団、オーケストラ・アンサンブル金沢、大阪交響楽団、千葉交響楽団、浜松フィルハーモニー管弦楽団、東京混声合唱団、広島ウインドオーケストラなどを指揮する。
2016年より2021年まで、仙台ジュニアオーケストラ音楽監督を務める。

【プログラム】

シューベルト　　イタリア風序曲第2番ハ長調　D.591

ハイドン　　交響曲第99番変ホ長調

第1楽章 Adagio –Vivace assai
第2楽章 Adagio
第3楽章 Menuetto, Allegretto
第4楽章 Finale, Vivace

♩休憩♩

ベートーヴェン　　交響曲第8番ヘ長調　op.93

第1楽章 Allegro vivace con brio
第2楽章 Allegretto scherzando
第3楽章 Tempo di Menuetto
第4楽章 Allegro vivace

【曲目紹介】

◆シューベルト:イタリア風序曲第2番ハ長調D.591　～まさにロッシーニの序曲～

1816年11月、イタリアの作曲家・ロッシーニ(1792-1868)の歌劇がウィーンで初めて上演されると、ウィーンの街に「ロッシーニ・ブーム」が巻き起こります。このブームは、音楽に陶酔して失神した熱狂的なファンもいたほどすごかったようです。シューベルト(1797-1828)は、翌1817年に「イタリア風序曲」という演奏会用序曲を2曲書いていますが、まさにロッシーニ・ブームの最中でした。シューベルトもこのブームにあやかろうと思ったのかもしれません。

イタリア風序曲のうち、第1番ニ長調は、歌劇「魔法の竪琴」序曲(一般に「ロザムンデ」序曲と言われている曲)の基になった曲で、当団の第85回演奏会(2019.9.22)で取り上げていますが、それほどロッシーニ臭は感じません。それに対して第2番ハ長調は、ロッシーニが作ったと言われても違和感がないほどロッシーニの特徴をよく捉えています。特に、同じパッセージを繰り返しながら*pp*から*ff*まで長く続くクレッシェンドが出てきますが、これは「ロッシーニ・クレッシェンド」とも呼ばれ、ロッシーニ最大の特徴と言えます。具体的にロッシーニのどの序曲の影響を受けているかはよく分かりませんが、強いて挙げれば、1816年12月にウィーンで上演された歌劇「タンクレーディ」の序曲に似たパッセージが何ヵ所か見られるので、この序曲の影響を受けている可能性があります。

イタリア風序曲の楽譜は生前には出版されておらず、出版されたのは作曲から50年近く経った1866年のことです。実は、この「イタリア風序曲(Ouvertüre im Italienischen Stile)」というタイトルは、シューベルト自身が付けたものではなく、シューベルトの死後に兄のフェルディナントが作品目録にこの曲を加えたときに付けられたようです。第2番の原題は「序曲ハ長調(Ouvertüre in C dur)」です。もし原題どおりなら、この曲は埋もれていて日の目を見ることはなかったでしょう。いっそのこと「ロッシーニ風序曲」というタイトルにしていたら、もっと人気が出ていたかもしれません。ロッシーニは作曲家のほかに美食家としても名を馳せており、「ロッシーニ風○○」というのは料理の世界で有名になっています。牛フィレ肉ステーキの上にフォアグラとトリュフの載ったフランス料理は特に有名です。ただし、この曲が「ロッシーニ風序曲」というタイトルだと、ボリュームたっぷりの曲を想像されるかもしれませんが…。

◆ハイドン:交響曲第99番変ホ長調　～暗号が隠された交響曲？～

ハイドン(1732-1809)は、1791～95年の間に、ザロモン(1745-1815)の招きでロンドンを2回訪問しています。ザロモンは、ロンドンに移住したドイツ出身のヴァイオリニストで、興行師としても活躍していました。余談ですが、モーツァルト(1956-91)の交響曲第41番に「ジュピター」と名付けたのは、ザロモンだと言われています。この2回のロンドン訪問はいずれも大成功で、ハイドンは相当の収入を得たようです。しかし、2回目の訪問では、ハイドンはすでに61歳、馬車や船で行く旅は相当大変だったと思われます。当時のベルリン音楽新聞の記事によると、「ハイドンは2回目のロンドン訪問に門下のベートーヴェンを帯同しようとしたが、それは実現しなかった。」とあります。この頃、ベートーヴェンにはハ短調とハ長調の2つの交響曲の構想があったようですが、これらはスケッチの段階で終わっています。ロンドン訪問が実現していたら、この未完の交響曲を完成させていたかもしれません。とすると、「第九」は第11番となって、「トイチ」、「サムライ」などと呼ばれていた？。

ハイドンの交響曲の中で、最後の交響曲群である第99番～第104番の6曲は、1794～95年の2回目のロンドン訪問の際に初演された交響曲で、「第2期ロンドン(ザロモン)交響曲」と呼ばれています。この交響曲群のトップを飾る第99番は、ロンドン訪問前の1793年にウィーンで書かれています。この曲はハイドンの交響曲の中で初めて2本のクラリネットが加わった完全二管編成の曲であり、これ以降、第102番を除きクラリネットが加わっています。

偶然なのか、意図的なのかは分かりませんが、この曲には、他の作曲家の作品に似たところがいくつかみられます。これはあくまで私見ですが、例えば、第1楽章第一主題は、サリエリ(1750-1825)の歌劇「オルムズの王アクスール」の序曲の主題に似ています。この歌劇は1788年にウィーンで初演されて、大ヒットしています。当然ハイドンがこの歌劇を知らないはずはありません。また、第2楽章は、モーツァルトの交響曲第41番「ジュピター」の同楽章を思わせます。初演日時は不明ですが、「ジュピター」も1788年に完成しています。第2楽章の主題を階名で歌うと、「ジュピター」は「**ドーソミーーーレドシ**」、この曲は「**ドーーソミー**(ミミー)**レードー**(ドー)**シ**」です。調性は違いますが、どちらもゆったりとした3/4拍子で、音の進行が全く同じです。ここまで一致すると、偶然とは思えません。さらに、第4楽章の主題に出てくる十六分音符のモチーフを上下反転させると、モーツァルトの交響曲第39番同楽章の主題のモチーフになります。

これらが意図的なものなら、ハイドンがこの曲に込めた「暗号」かもしれません。特にモーツァルトとは互いに尊敬し合う間柄でした。1回目のロンドン訪問の途中でモーツァルトの死を知らされたハイドンは悲嘆に暮れたと言われています。帰国したハイドンが、後輩の作曲家の夭逝を悼んで、その最後の交響曲群の主題をこの曲に暗号として隠し入れたとしても不思議ではありません。

◆ベートーヴェン：交響曲第8番ヘ長調op.93　～メトロノームを取り入れた交響曲～

某放送局が数年前にベートーヴェン(1770-1827)の作品の人気度を調査したところ、交響曲の第1位は下馬評どおり「第九」でしたが、第2位は、「運命」や「田園」、「英雄」という知名度の高い曲を押さえて、「第7番」という意外な結果でした。第8番は、この二つの人気の高い交響曲に挟まれた小規模な曲で、目立たないため人気という面では今一です。この曲は、1812年に書かれ、1814年2月に初演されています。初演時には第7番も一緒に演奏されていますが、そのときも人気は第7番に集中していたようです。そのことを弟子のツェルニーに問われると、ベートーヴェンは、「聴衆がこの曲を理解できないのは、この曲が優れているからだ。」と弁護したと伝わっています。「芸術性と大衆性は必ずしも相容れない」ということでしょうか。ベートーヴェン自身は、コンパクトにまとまったこの曲に愛着があり、自信があったのかもしれません。

この曲の特徴は、何と言っても第2楽章にあります。通例、交響曲の第2楽章は、アンダンテやアダージョのゆったりとした緩徐楽章ですが、この曲では、「アレグレット・スケルツァンド」と標示され、規則正しいリズムの上にユーモラスな旋律を奏でる特殊な曲が置かれています。これは2拍子系のスケルツォと考えられます。そのためか、第3楽章は通例のスケルツォではなく、ゆったりとしたメヌエット(風な曲)になっています。ちなみに、「第九」では、第2楽章がスケルツォ、第3楽章が緩徐楽章になっていますが、この曲がその前哨戦であったのかもしれません。

この第2楽章のリズムと旋律は、自身の四声のカノン「An Märzel (メルツェルに寄す)」(1812)から転用されたと言われています。メルツェルは音楽用のメトロノームを開発し1816年に特許を取得したドイツの発明家です。このカノンには、「lieber Märzel (親愛なるメルツェル)」や「grosser Metronom (偉大なるメトロノーム)」などの歌詞が出てきます。ただし、第2楽章の旋律をカノンに転用したという逆の説もあり、どちらが先か、その真相はよく分かっていません。いずれにしても、ベートーヴェンがメトロノームを好んだということは、確かなようです。ちなみに、ウィーン中央墓地に眠るベートーヴェンの墓碑の形はメトロノームだと言われています。

♪　第９１回メンバー　♪

第1ヴァイオリン	三瓶政一、☆時山響子、戸張純一、西川富之、西村 実、本山まり子
第2ヴァイオリン	相羽あゆみ、石嶺寿子、中村 要、宮本 敦、♪森 未知、森上由紀
ヴィオラ	柴野かおり、下山純也、♪関口孝司郎、山口 彰
チェロ	植田圭司、緒方 淳、永田隆司、藤村ゆ香、♪三次摂子、
コントラバス	江川博之、♪須賀敬亮

☆コンサートマスター　♪弦楽トップ

フルート	谷口玲子、徳植俊之
オーボエ	市川亜理、伊藤佐保子
クラリネット	浅見康博、中嶋智子
ファゴット	越島康太郎、奈良岡康子
ホルン	尾形武一、友田昭博、町田明子
トランペット	薗部晴信、米川智子
ティンパニ	星野武徳
トレーナー	戸澤哲夫（東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団コンサートマスター）
練習指揮	山上孝秋

♪　次回の演奏会ご案内　♪

日時：２０２３年２月１２日（日）
場所：府中の森芸術劇場　ウィーンホール
指揮：平川 範幸
曲目：メンデルスゾーン　交響曲第３番「スコットランド」　ほか

詳細はＨＰ　http://www.e-dimanche.jp/　をご覧ください。
※招待券をご希望の方は、アンケートにご記入ください。

本日のアンコールについて

本日のアンコールは、

シューベルト：「ロザムンデ」間奏曲第３番

でした。

実在のキプロスの女王
（カタリーナ・コルナーロ）
の肖像画

ウフィツィ美術館所蔵

シューベルトらしい美しい旋律は、弦楽四重奏曲などにも使われており、「ロザムンデ」と言えば真っ先にこの曲を思い浮かべますが、この無機質な曲名は意外と知られていません。

正式には、劇付随音楽「キプロスの女王ロザムンデ」第３幕間奏曲です。せめて「愛の夢」とか「ロマンス」などの愛称があればもっと有名になったかもしれませんね。